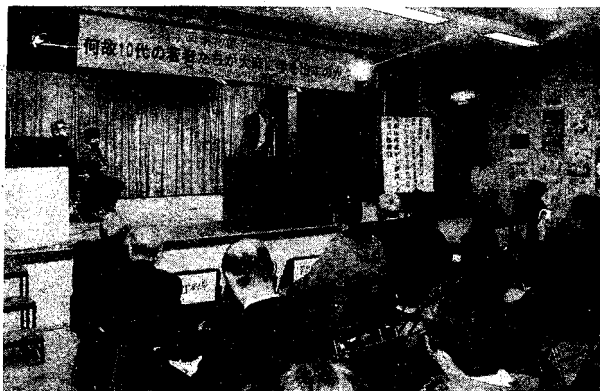


甲府でセミナー 男性4人が体験談

大麻「薬物連鎖の入り口」

県内 摘発最多 安易な使用に警告

「たばこと同じ」「ほかの薬物は怖いけど大麻なら」。山梨ダルクを支援する会が十三日、甲府・県ポランティア・NPOセンターで開いた薬物依存症セミナーで、大麻依存症に苦しんだ男性四人が体験を語った。大麻を吸い始め、のめり込み、エスカレートしていった経緯、依存症から回復することの難しさ。安易な気持ちで大麻に手を出すことの危険性を訴えた。県内では今年、大麻摘発者が過去最多ペース。全国の有名大学の学生らによる大麻事件も相次いでいる。専門家は「大麻は覚せい剤など、ほかの薬物に移行するきっかけになる」と指摘した。



大麻依存症の経験などを話し合ったセミナー
甲府・県ポランティア・NPOセンター

「大麻に怖いという気持ちはなかった。たばこと同じ感覚」。十八歳の時に初めて大麻を吸ったという男性(匿名)はセミナーの参加者を前に、淡々とした口ぶりで語った。この程度の快感ならと、覚せい剤などハードなドラッグにエ

タルク(DARC) 薬物依存症者が共同生活を通じて社会復帰を目指す組織(施設)で、全国的に開設の輪が広がっている。ドラッグ・アディクション・リハビリテーション・センターの略。山梨タルクは今年2月に甲府市内で発足し、現在は約20人が1日3回のグループセラピーやスポーツプログラムなどの活動に取り組んでいる。5月に経済支援などを行う「山梨タルクを支援する会」が発足した。

セミナーでは、県内外のダルクのメンバー四人が「私が大麻にハマった理由」と題して体験談を語った。山梨タルクの男性は中学時代、好きなミュージシャンが大麻を吸

たことの影響を受け、興味を持ち始めたという。十七歳の時に先輩から勧められ吸い始め、「ほかの薬物は大変だが、大麻は大丈夫だと思った。やっていると自分が特別な存在になった」と思っていたと振り返った。結局、家も仕事も失い、ダルクに逃げ込んだ。

別の男性(匿名)は大麻を始めたきっかけについて「フランスのトレーションのたまら日常から自由になりたいと思っていった」という。「大麻を使用す

スカレートしていった」

同会は薬物依存からの回復を目指す人たちの自助組織「山梨タルク」の支援活動を行っており、セミナーは大麻依存症の実態を知ってもらおうと初めて開催した。県警によると、県内では今年、九月までに二十四人が摘発され、過去十年で最多。県立高校生や私立大生が含まれるなど、若者への大麻汚染が深刻になっている。

広がる大麻汚染 経験者らが恐怖語る

「知らぬ間に制御不能に」

大麻など薬物の恐ろしさについて経験者が語る講演会「なぜ10代の若者たちが大麻に手を出すのか?」が、私が大麻にはまった理由(山梨タルクを支援する会主催、読売新聞甲府支局など後援)が13日、甲府

市丸の内県ポランティア・NPOセンターで開かれ、約100人の参加者が真剣な表情で聞き入った。最初に壇上上がった山本大さん(43)は元人気クラブDJ。18歳で大麻に手

に自分がコントロールできなくなっていた。薬物を買うために窃盗も繰り返したが、それが悪いことだとも認識できなくなっていた」と、赤裸々に体験を語った。山本さんのほかにも3人の元中毒患者らが「フアッション感覚で手を出してしまった」「大麻なら体に悪くないと思った」などと口々に薬物の怖さを語った。講演した住吉病院(甲府

と考えがますます、時間と空間の感覚がゆがむ。いつしか現実と非現実の区別がつかなくなると話した。

住吉病院(甲府市)の大河原昌夫副院長は、大麻が引き起こす不安感や幻覚などの障害について講演。「大麻に依存する傾向を持つ人は、覚せい剤など、より危険な薬物にはまる恐れがある」と述べ、大麻は常習性がなく、無害などとする説を否定した。

支援する会によると、最近ではインターネットで大麻の種が購入できるなど簡単に栽培できることや、海外では事実上、合法健康への害は少ないなどの風評が広がっているため、興味本位で手を出す若者が多いという。同会の担当者は一度、依存症になれば回復するのは難しい。大麻の有害性や依存性を正しく理解することが必要と呼び掛けている。

↑ 2008年12月14日(日)
山梨日日新聞記事

→ 2008年12月14日(日)
読売新聞記事

市)の大河原昌夫副院長は、最近の大学生の大麻汚染に触れ、「一度使用したらもう終わり」ではなく、大切なのは彼らを立ち直らせるためにはどうしたら良いかを考えることと訴えた。